

作家 夏樹 静子

月刊誌『理念と経営』を発行しているコスモ教育出版が、2008年から「心に残る、ありがとう」の原稿募集を始めた。千字以内の応募作が毎年4〜5千余り集まり、中西進、山折哲雄両先生の末席に私が加わって、公開選考で受賞作を決める。

テーマはやはり母と子の絆が抜きん出て多い。23歳から独りで子育てした女性が、生活苦のあまり、2歳の息子を背負って入水自殺を図るが、波の音で目ざめた子が笑って月を見あげている顔を見て思い留まる。あるいは、母と兄弟の3人家庭で、ある日母が弁当を作って遠足に行く。帰りに湖の土手で母を中へ手をつないで並ぶと、母が自分と一緒に2人を水中へ引きずりこもうとする。命がけの引きあい兄弟の力が勝った。いや、事実はいや死のう。

あすへの話題



母親の心の壮絶な死闘に母自身が勝ったのだ。

どちらも昭和半ば頃のことだ。戦後、国民のほとん

んどが明日の糧にも窮した時代があったことを、私達は決して忘れてはならない。

勿論、父や師や友や、色々な人への多様な形の生涯忘れない感謝の体験は、拝読する私にも心が洗われる貴重な経験である。

中西先生が終りの講演で「人間は誰しも「負」と巡り合い、数奇な運命を余儀なくされている。そのような人間にとって、生きぬく力、生きぬく手段とは何か、といえは、「ありがとう」と言う感謝の心である。」と語られた。

今の時代、物に不自由せず両親に溺愛されて育った「負」の少い独りっ子も、言葉だけでなく、真に感謝する心を持ち、それが自身の幸福を生み出すことを知ってほしい。5月、こどもの日や母の日を、皆さんはどんなふうに過ごされただろうか？

「ありがとう」の季節